

# 分裂する天蓋

——阪神淡路大震災をめぐる追悼・慰靈のかたち

今井信雄  
いまい のぶお

## はじめに

宗教社会学者ピーター・バーガーを引き合いに出さずとも、一九九五年一月一七日に起きたあの震災はわれわれの「天蓋」を粉々にした。被災地で行ってきたのは、自分たちの生活と生きていく拠り所をもう一度つくりあげていくこと。そして、まさに粉々になつた「天蓋」をふたたびつくりあげようとする事であつた。しかしその天蓋は、震災以前とは同じものとはならないだろう。

本稿の基本的な捉え方は、震災犠牲者の追悼・慰靈のかたちを主に近代性との関わりにおいて、とくに社会学者A・ギデンズのいう「再帰的近代」<sup>〔1〕</sup>として、震災以降

の慰靈・追悼を捉えようということである。近代社会では、あらゆるもののが反省・省察（リフレクティビティ）の対象となり、その根拠が疑われる。そのため社会的な基盤があやうくなり、何事も自分で決めるという作業を持続させていかなければならない。

まず、そのような現代的潮流の結果として三つのことを指摘しておく。はじめに「宗教的行為と宗教的形態の分離」、次に、「宗教と地域社会の分離」、そして、「宗教と宗教的記号の分離」、である。

まず、宗教的行為と宗教的形態の分離について述べておく。これは「宗教」的なふるまいにおいて、その行為と形態とがいつたん分裂したうえで、その行為と形態とをこの三つのはざまで生まれてきたのが、阪神・淡路大震災をめぐってなされてきたさまざまな慰靈・追悼のかたちである。本稿では、震災の慰靈碑や記念碑などのモニュメントや追悼行事、消費空間をかたちづくる追悼イベントを題材に、阪神・淡路大震災をめぐる追悼・慰靈のかたちを考察したいと思う。

## 一 震災のモニュメント

### モニュメントを捉える三つのレベル

阪神・淡路大震災の被災地では、多くの地域で追悼・慰靈の行事が行われてきた。<sup>〔2〕</sup>それは地元の自治会やボランティア団体などが地域で亡くなつた人を追悼・慰靈するために行う行事である。そして、それらの行事が行われている場所には慰靈碑や記念碑などが建てられていることが多い。ここでは、筆者が以前行つた震災のモニュメントに関する調査結果（今井二〇〇一など）を参照しながら、追悼・慰靈をめぐるかたちを考察したい。

そして、宗教と宗教的記号の分離については、宗教がひとつの記号として流用される事態を指している。とりわけ、宗教が消費社会における消費の「記号」として流用され、ひとつの都市空間を構成することは、のちにみる「シミュラーケル」の空間においてしばしばみら

が建てられている。震災から一年を迎えた現在、すでに二〇〇ヶ所を超えているという。これらは一般的に「震災モニュメント」と呼ばれているのだが、この震災モニュメントに関する経緯はつぎのようなものである。まず、地元の写真家である上西勇氏が慰霊碑や記念碑などを写真にとつて平成一〇年に写真展を開いたことから始まる。この写真展がきっかけとなり、地元のボランティア団体「がんばろう!!神戸」や毎日新聞社などが中心となり、被災地のモニュメントを調べることとなつた。

やがてこれらの碑は「震災モニュメント」と名づけられ、平成一年一月一七日に五五カ所を紹介した最初の「震災モニュメントマップ」が作成された。この「マップ」は大きな反響を得て、震災モニュメントをめぐる「震災モニュメント交流ウォーキング」も定期的に開かれるようになつた。その後、震災モニュメントの数も増え、「マップ」も改訂されていく。「がんばろう!!神戸」はNPO法人「HANDS 阪神淡路大震災 1.17希望の灯り」として活動することとなり、「マップ」の活動も「HANDS」に移つた。そして現在に至つている。

碑の建立——社会現象としてのモニュメント

まず第一の側面として、各地域でモニュメントがつくりしていく過程をどのように捉えられるか。たとえば島薗進は次のように述べている。「震災モニュメント」の例は、教団宗教の枠を超えたところで、住民の宗教的な心情の発露が見られる例である。新しいタイプの『巡礼』や『聖地』が人々を引きつけているが、それは教団とは関わりがない。かつてなら寺院や神社が関与したはずのものが、今は特定の教団宗教の外で行われることがある。以下、それぞれの側面について考察する。

多い。これは地域社会の共同性を教団宗教がくみ上げるのがますます困難になつてることの反面でといえるだろう」（島薗二〇〇一・四七・四八）。

ある地域社会のなかでの檀家や氏子のつながりと地域社会とのつながりが重なつてゐるならば、宗教が地域社会を支え地域社会が宗教を支えるといふ、「宗教」と「社会」との関係を指摘できるだろう。しかし、多種多様なモニュメントの存在は、社会全体として檀家や氏子のつながりが地域社会と重なつていない、ということを示しているのではないか。これは、後で述べるが、宗教組織がつくったモニュメントの少なさと関連していると思われる。

### 群としてのモニュメント

#### ——「震災モニュメント」という名づけ

次に第二の側面として、各地のモニュメントが震災モニュメントマップに掲載され、社会的認知を受けていく過程を指摘できる。言うまでもなく、それぞれのモニュメントはそれぞれ固有の文脈の中で意味づけられてきた

ものである。ある者は亡くなつた生徒のために、ある者は地域の犠牲者のために、ある者は震災の教訓を広く伝えるためにつくられたといふ、独自の意味合いを持つてゐる。しかし、マップというかたちでモニュメントが掲載されることで、その意味合いとは別次元の意味を与えることになる。<sup>(3)</sup>たとえば震災モニュメント活動の中心になつてきた堀内正美氏は次のように述べている。「九年の一月、震災モニュメントマップが刷り上がつた時、怖くもあつた。遺族の人に一人でも『人の痛みがわかっているのか』と怒られたら捨てようと思つていた」（震災モニュメントマップ作成委員会編二〇〇一・一五）。これは固有の意味を持つモニュメントにマップという形で別次元での意味合いを付与することの不安を示したものといえるだろう。

文化社会学の小川伸彦は、各地のモニュメントが「マップ」に掲載されていくこの過程を「群としてのモニュメント」としての意味を付与することだと指摘する。「微細に異なる個々のモニュメントをひとつつの平面に束ね、一望を可能にしているこの地図は、ひとつの博物館